

ヒラタケの簡易人工栽培法（概要）

農學博士

西門義一

宮脇雪夫

一 はしがき

ヒラタケ（平茸）は味の點で殊に齒さはりの點でシメヂとは甲乙なく外觀もよく類し、現在市場での取引値段にも開きが少ない。シメヂは單に秋、特定の土地にしか發生せないが、平茸は人工で秋から春までの間、如何なる土地にも發生せしめ得る。同じく人工栽培されて居るシヒタケと比較すると其香の點では及ばないが、其栽培が遙かに容易で、且つ豐産、如何なる地方にでも僅少の空地を利用して栽培し得る。春三四月頃に植付れば其秋には既に坪當り五—一〇貫の生平茸を收穫し、後三—四年間は收穫を續け得る。平茸は斯く栽培容易、發生迅速且つ豐産と三拍子揃ひ、食糧増産の現下の要請にびつたり適合して居る。夫で其栽培は目下急速に普及し、爲めに之に關する照會が頻々と來て應接に遑がないから栽培の要點のみを簡單に記述する。

二 平茸栽培用原木

には殆んど何れの樹種でも差支はないが、普通に使用し適當とされて居るものは、エノキ、ヤナギ類、ポプラ、ドロ、カヘデ類、シデ類、ムクノキ、ハンノキ、ネムノキ等である。桑、イチヂク等の不用株も其儘利用出来る。原木の太さは縦伏せと横伏せによつて異なるが、縦伏せならば直徑四—五寸から二尺位で何程太くてもよい。四—五寸以下の物は枝と共に横伏せに使用し得る。原木伐採の時期は年中何時でも大した差はないが、秋から春までの落葉後發芽までの間がよい。伐倒した樹は乾くと固くなるから、生の内に長さ五—七寸に輪切りする。之を二口

宛對にして切口を合はせて植付け迄積んでおく。直徑四—五寸以下の物は長さ二—三尺に切る。

三 種菌の植付

平[○]茸[○]種[○]菌[○]としては、前年に發生した櫓木を栓狀の細片として埋木する事もあるが、平茸は多濕の狀態で栽培するので櫓木が雜菌に侵され不純になり易い。夫故種菌用櫓木は選擇が困難であるから純粹培養菌絲を用ひるが安全である。此目的には當大原農業研究所でも鋸屑培養基に純粹培養して實費頒布して居る。時には茸を細かく碎いて之に米糠等を混合した物も用ゆるが成績は良くない。植[○]付[○]の[○]時[○]期[○]も別に決りはないが三月から四月一杯位がよい。植付が後れると菌絲の發育が後れ其年の秋に茸の發生せない事もある。植[○]付[○]の[○]方[○]法[○]は縦[○]伏[○]せ[○]では輪切りにした原木の横斷面に種菌を塗り付ける事もあるが、第一圖の如く斷面に直徑六—七分のボートウで深さ五—六分の孔を穿ち之に種菌を植付ける方がよい。植付には瓶に培養された種菌を皿か鉢に取り出し、指先でかなり固い位に填める。植[○]孔[○]の[○]數[○]は直徑一尺の原木ならば五—七個所位として原木の太さに應じて數を加減する。植[○]込[○]み[○]の[○]済[○]んだ[○]原[○]木[○]は第一圖の様に植付けた面と面とを合はせて積み重ねる。之は縦伏せと云ひ原木の太い場合であるが、細い原木は第二圖の様に横[○]伏[○]せ[○]にするから、側面にその太さ長さに應じて三—五個（一側に二—三個其反對側に一—二個）の孔を穿ち同様にして種菌を填め込む。

四 櫓木の伏せ込み

種菌を植付けた原木即ち櫓木^{カダギ}は、之に菌絲がなるだけ迅速且つ旺盛に繁殖する様に伏せ込を行ふ。伏[○]せ[○]込[○]み[○]場[○]所[○]は日當り又は風通し等を考慮する要がないから住宅の周圍家の蔭でも庭園とか畑の一角でも樹の下でもよい。只排水の悪い處は不適當である。櫓木の分量にもよるが大體短[○]冊[○]形[○]の[○]冷[○]床[○]の[○]如[○]き[○]幅[○]四[○]尺[○]乃[○]至[○]六[○]—[○]七[○]尺[○]、長さ適宜の物を造り（第三圖）、之に第一圖の様に二個宛積み重ねた下の方の櫓木の半分乃至三分二位を土中に埋め込む。

其際椿木と椿木との間には四―五寸位の間隔をおく必要がある。斯く伏せ込んだ上に古蘆、藁等を被せて日光を遮り濕氣を保つ様にする。斯くして六―七月頃には白色の菌絲が椿木の植付面一體に蔓延し兩面が菌絲で密着する位となるから、二個宛積み重ねた上の方の圓板を取りはがして之を前と同じ様に短冊形の床に、菌絲植付面を上方にして半分位土中に埋せ込む。此除椿木の植付面が水平になる様且又一ヶ所に伏せ込んだ椿木の上面が何れも大體同じ高さになる様にせぬと後の都合が悪い。斯く伏せ込んだ椿木は蘆又は菰で被ひをするか或は小屋掛をする。小屋掛は第三圖の如くで内部の手入の爲めに片方の屋根は自由に開閉出来る様にしておく必要がある。小屋掛は兩屋根でも片屋根でも或は四分六分位にしても何れでもよい。兩屋根の大形の小屋にすれば一方に出入口を作り中央に通路を設けておけばよい。右の如くに椿木を二個宛對に積み重ねて伏せ込むと場所も少くて濟み菌絲の蔓延もよいが、上段の圓板の方が下段よりも菌絲の生育が幾分後れる傾がある。夫で初めから第三圖の如くに一面に伏せ込む方法もある。此場合には植付面には一々菰片の如き物で被ひをするといふ。以上は太い原木で所謂縱伏せにした場合であるが細い原木は横伏せにする。第二圖に示した様に椿木を土面に横たへて其半分乃至三分の一を土中に埋め込み、植孔が土面に近い處に行く様にする。

五 管理及收穫

原木に種菌を植込み伏せ込みを行つた物は如露で充分灌水する。其後天候にもよるが四―五日乃至一週間には一度宛灌水し、原木に充分濕氣を保たせる。少くとも周圍の土が乾いて白くならない程度にする。只地面に水の溜る様では過濕となるから排水の點は注意を要する。又天候によつては被ひの蘆をはがして通風を計る。梅雨あけ後の高温乾燥の候には隔日位に灌水の要がある。六月頃になると植付面の處には白色の菌絲の蔓延を認める。前記の如く二個宛積み重ねた物は上の圓板だけは七月一杯位に取りはがして別の床に移し蘆で被ふか小屋掛をする。何れにし

ても晩くも九月初め迄には小屋掛（第三圖）をすませる。又伏せ込んだ
 櫓木は途中で伏せかへはせぬがよい。管理其他により多少の遅速はある
 が春三四月頃に伏せ込んだ櫓木には其年の一〇月頃から芽が發生し始め
 る。それから約一週間で最盛期になる。第一回の採集後二―三週間で第
 二回、更に二―三週間で第三回の最盛期に達し、それから氣溫も下るの
 で更に四週間もして第四回目の收穫が出来る。多くは最初又は第二回目
 が發生最多く其後分量が漸減する。收穫は市價の關係で傘の大體八分開
 きの時に株の根元からする。岡山附近では一個四五〇匁入の箱に荷造し
 て大阪市場等へ出荷して居る。芽の發生は秋から早春にかけて二―三月
 間續くが、其後は多少通風を注意し、餘りに多濕に陥らぬ様にして櫓木
 の腐敗を防ぎ、翌年の九月末頃から充分灌水して第二年目の收穫に移る。

六 わすび

以上は平茸栽培の概要であるが何分簡單を期した爲め
 に不備の點も少なくないと思ふ。只要點だけは落してない積りであるか
 ら、熟讀の上栽培を試みられるならば決して失敗はない筈である。

（昭和十八年二月稿）

